

民族主義者か超人か： W. B. イェイツのイスカリオテのユダ観と その変遷について

伊東裕起

はじめに

十二使徒のひとりでありながら、キリストを当局に引き渡した「裏切り」により、イスカリオテのユダはキリスト教の伝統的な教義では許されざる罪人、「悪魔の申し子」¹と長年みなされてきた。ユダを罪が赦されたもの、天国に行ったもの²として説教した13世紀のドミニコ会修道士ヴィンツェンツ・フェレールは、カトリックの民衆から高く支持されたものの、教会当局から異端宣告を受けたという²。しかし、近代以降、「ユダ伝承は文学と心理学の分野でも好んで取り上げられ」³、多くの芸術家がユダを題材とした作品を創作した。W. B. イェイツ (W. B. Yeats) もその一人である。彼はユダを重要な登場人物として描いた戯曲『カルヴァリ』(Calvary) を、日本の能楽に影響を受けた舞踏劇として創作したことで知られるが、彼のユダに対する考え方には、時期によって違いが見られる。本稿では、イェイツのユダ観とその変遷について論じる。

1. イェイツの二つのユダ観

イェイツは自らの創作の構想メモを多く残している。その多くは相談も兼ねて書かれた、グレゴリー夫人 (Lady Gregory) 宛ての書翰に見出される。能を下地にした舞踏劇『エマーのただ一度の嫉妬』(Only Jealousy of Emer) を書き上げた直後、1918年1月14日付の手紙で彼は次の戯曲の構想について書き送った。

Dear Lady Gregory...Today I finished my new Cuchulain play and am hesitating on a new one, where a Sinn Feiner will have a conversation with Judas in the streets of Dublin. Judas is looking for somebody to whom he may betray Christ in order that Christ may proclaim himself King of Jews. The

Sinn Feiner has just been persuading a young sculptor to leave his studio and shoulder a rifle.

Judas is a ghost, perhaps he is mistaken for the ghost of an old rag-picker by the neighbourhood. I will not know whether the idea is too theoretical and opinionated (?) till I have made prose draft. Before that I shall write a couple of lyrics.⁴

親愛なるグレゴリー夫人へ（中略）今日、私は新しいクーファーリン劇を書き終えました。そして今、また新しい劇を書きあぐねています。その劇では、あるシン・フェイン党員がユダとダブリンの街角で対話するのです。ユダは、キリストが自分をユダヤ人の王だと宣言させるため、キリストを引き渡すべき相手を探しており、シン・フェイン党員は若い彫刻家を説きふせ、アトリエを離れてライフル銃を取らせようとしています。

ユダは幽霊であって、もしかしたら街の人々に年老いたボロ布拾いの幽霊と間違われかねない様子です。このアイデアは理論に走りすぎていて主張が強すぎるのでしょうか？ 散文の草稿を書いてみるまで私には分かりません。その前に二篇の抒情詩を書くことになるでしょうが。

この手紙から、イエイツはダブリンの街角でシン・フェイン党員の革命家とユダが会話する、という劇を考えていたことがわかる。しかし、この劇は結局書かれなかった。その理由は「理論に走りすぎていて主張が強すぎる」(too theoretical and opinionated) とある通り、やや図式的でもあったと彼自身が判断したためだろうか。

シン・フェイン党員の革命家は彫刻家、つまり芸術家を自分の理想のために行動に駆り立てて犠牲にしようとし、ユダは同様に理想のために神の子を行動に駆り立てて犠牲にしようとする。革命家とユダが対比されるという構図である。この構図における革命家と裏切り者の対話という部分は、後の劇『骨の夢』(*The Dreaming of the Bones*)につながり、ユダに関する部分は『カルヴァリ』につながったと推測できる。

ここで一つ、注目すべき点がある。この時点でのイエイツのユダ観である。イエイツはユダの裏切りの理由がユダヤの民族主義に基づくものだとしている。つまり、ユダはユダヤ民族をローマの圧政から解放する民族主義的なメシアを望んでおり、イエスをユダヤ民族の王として目覚めさせるために彼はイエスを売った、という解釈である。

このような民族主義者としてのユダ像は、実は珍しいものではない。荒井献によれば、このようなユダ観は、ユダの名に続く添え名の「イスカリオテ」を「短刀を持った刺客」、すなわちシカリ派と解釈することからきたものであるという⁵。シカリ派は

ユダヤ民族主義の過激派であり、ローマ人や親ローマのユダヤ人を短刀で暗殺した人々である。また、このようにユダをシカリ派とする見方は、特に18世紀以降に広まった見方であり、その代表的なものとしてゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe) が『詩と真実』(*Dichtung und Wahrheit*) で示した解釈があると指摘されている⁶。ゲーテは次のように書く。

すなわちユダは、他のもっとも賢明な弟子たちと同じく、キリストが統治者として、民の長として名乗りを上げるものだと確信し、これまでためらいを克服できないでいる主を、力づくで行動させようと思い、そのために、同様にこれまで動こうとはしなかった僧侶たちと実力行動にかり立てた、というのである。⁷

これはイエイツが手紙に書いたユダ像と似ている。エドワード・オシェー (Edward O'Shea) の『イエイツ蔵書目録』(*A Descriptive Catalog of W. B. Yeats' Library*) にゲーテの『詩と真実』は見当たらないが、マジョリー・パーロフ (Marjorie Perloff) によると、イエイツは実際にゲーテの『詩と真実』を読んでいたという⁸。イエイツのユダ観がゲーテに直接影響を受けたかは定かではないが、ユダを民族主義者と見る彼の見方は、ゲーテのユダ観と重なる。

また、アビー・ベンダー (Abbey Bender) の研究によれば、アイルランド文芸復興運動の作家たちの間において、古代イスラエル/ユダヤ属州およびユダヤ人をアイルランド人およびアイルランドと同一視する見方が広まっていたという⁹。どちらのネーションも、大国による植民地化やディアスポラ、民族言語の衰退などを経験してきたものであるが、アイルランドの民族主義者はその二つを同一視することにより、アイルランドの独立を神によって約束されたものだとみなしたのである。アイルランド自治法案を中心とした政治運動が活発だった19世紀末には、自治権の確立は出エジプトに、パーネル (Charles Stewart Parnell) はモーセに頻繁に喩えられており、1916年の復活祭蜂起以後は、ピアース (Patrick Pearse) が描いたように、処刑された革命家たちは殉教者あるいはキリストに喩えられた¹⁰。アイルランド文芸復興の旗手の一人であったイエイツも、そのような類推に慣れていたと思われる。

しかし、前掲の手紙の約2年後に出版された『カルヴァリ』や、イエイツの神秘主義哲学書『幻想録¹¹』(*A Vision*) では、イエイツはユダの裏切りについてそのような民族主義的な解釈をしていない。『カルヴァリ』において、キリストの霊と向かい合ったユダの霊は次のように語る。

Judas. I have betrayed you
Because you seemed all-powerful.

. . . .
 . . . I thought,
 'Whatever man betrays Him will be free';
 And life grew bearable again. And now
 Is there a secret left I do not know,
 Knowing that if a man betrays a God
 He is the stronger of the two?¹²

ユダ：私はあなたを裏切った。
 あなたが全能であるかのように思えたからだ。

(中略)

私はこう思ったのだ、
 「誰であれ、神を裏切るものは自由になる」と。
 そう思うことで、人生は耐えうるものとなった。今や
 私に分からない謎など残されているだろうか
 神を裏切る人は神よりも強いと
 知っている私に分からない謎などあるというのか？

神の手の中に制限されることのない自由を求めて、そして神より強いものになることを求めてキリストを裏切ったユダは、あたかもニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche) の超人のようにキリストの前に立つ。

また『幻想録』において、ユダは “Judas, who betrays, not for thirty pieces of silver, but that he may call himself creator”¹³ 「ユダ、銀貨30枚のためではなく、自らを創造主と呼ぶために裏切った男」と記されている。これも、他の価値基準に従うのではなく、自ら独自の価値基準の創造者になろうとするニーチェ的な超人に通じる姿である。

このように、1918年1月14日のグレゴリー夫人宛ての手紙と、『カルヴァリ』および『幻想録』では、ユダ観、特に裏切りの捉え方に明確な違いがみられる。それはなぜなのだろうか。

2. ユダと自動筆記

イェイツは1918年当時、妻ジョージ (George Yeats) の手による自動筆記を通した教導霊との対話¹⁴を繰り返し、日々思索を深めていた。特に1918年1月26日付および27日付の対話ではユダについての対話が多く見出される。ユダについての議論

を始めた1918年1月26日付の自動筆記を通した教導霊との対話メモは、この時点のイエイツがまだ民族主義的なユダを考えていたことを示している。例を下に挙げる。

28. Judas pities jewish race & so would have christ become their king?

28. No that is the action in the thought of Christ -the CG is that which gives the impulse never that which enriches & thinks.¹⁵

28番：ユダはユダヤ民族を憐れみ、それゆえキリストを彼らの王にしようとしたのか？

28番：違う それはキリストの考えの範囲内での行動に過ぎない——CGは衝動を与えはするが決して何かを考えたり豊かにしたりしないものだ。

この対話において、質問はイエイツから発せられたものであり、返答は妻の自動筆記によるものである。イエイツは、ユダがユダヤの人々を憐むがゆえに、キリストに王になってもらいたかったのかと自動筆記の教導霊に問いかけている。この対話におけるイエイツの質問は、グレゴリー夫人宛の手紙に書いたのと同じ路線、民族主義者としてのユダ観を踏襲している。しかし自動筆記はその解釈を否定し、the CG (Creative Genius, 後の体系での *Creative Mind*) についての話につなげようとした。Creative Geniusあるいは *Creative Mind* とは、『幻想録』の体系において人生の演劇の台本に対するアドリブとして喩えられる¹⁶ものである。ここでは、ユダの行動もキリストの考えの内であったことを述べている文脈から、ユダの裏切りは定められた運命に対する抵抗（それも神の予知のうちだとしているが）だと自動筆記は解釈しているようである。

また、翌日1月27日の対話では、自動筆記は次のように書いた。

24. because I am now going to write about your Judas

had to say something

Dont [sic] make your Judas the conventional bad man – make him the weak man who achieves a supreme good through his temptation.¹⁷

24番：何故なら私は今お前のユダについて書こうとしているのだから。

言っておくべきであった。

お前のユダを慣習的な悪人にはいけない——彼自身の誘惑を通して偉大なることを成し遂げる弱き男として彼を造型せよ。

自動筆記はこのように書き、イエイツのユダ観を変えようとする。それは、典型的な

悪人ではなく、その誘惑を通して最高の善を達成する人間として描くように、というものだ。この自動筆記が教導霊によるものなのか妻ジョージによるものか定かではないが、ともあれこの自動筆記は明確に独自のユダ観を持っているように思われる。

同日1月27日の対話では、自動筆記は独自のユダ観について、さらに踏み込んだ話をする。その日の対話の主軸は、subjectiveとobjectiveの二項対立（後に『幻想録』でantitheticalとprimaryとして体系化される）である。そこで自動筆記はユダをantithetical (subjective), キリストをprimary (objective) とし、primary (objective) なキリストはantithetical (subjective) なユダの絶望を憐れむことができないとする。

2. Why do you call despair of Judas Antithetical

2. At 8 – he hanged himself through despair of antithetical nature – christ pities primary despair

.....

5. Why does not C[hrist] pity the despair of Judas

5. He pities only primary despair – he does not pity antithetical despair because his mission is the objectifying of life the spiritualising of it and he pities therefore only the objective¹⁸

2番：なぜあなたはユダの絶望をantitheticalと呼ぶのか。

2番：第8相にて——彼はantitheticalの性質の絶望によって自ら首を吊った——キリストが憐れむのはprimaryの絶望のみだ。

(中略)

5番：なぜキリストはユダの絶望を憐れまないのか。

5番：彼はprimaryの絶望のみを憐れむ——彼はantitheticalの絶望を憐れむことはない。何故なら彼の使命は生命を対象物とすることや、生命を精神的なものとすることである。それ故彼はprimaryのみを憐れむのだ。

自動筆記によれば、primary (objective) な絶望とは “despair over sin poverty ill health loss of objective nature [sic]”¹⁹ 「罪や貧しさや病に対する絶望、外界の物事の欠乏に対する絶望」である。primary (objective) な絶望は、罪や窮乏や病という、いかにも憐みの対象となりそうな外的な苦境に対する絶望という側面を持つとされている。

一方、自動筆記の定義によると、antithetical (subjective) な絶望は “despair over self & relation of self to world of self analysis self knowledge [sic]”²⁰ 「自己に対する絶望、自己と自己分析・自己知識の世界との間の関係に対する絶望」であるとい

う。これも整理するのが難しい概念だが、自己の内省の中で自らに絶望することだろうか。

イエイツは、この自動筆記による定義に対して “Yet despair over self [is] apart from sin”²¹ 「しかし、自己に対する絶望は罪から遠いではないか」と尋ね、その通りだという答えをもらっている。

これらの説明から明確な定義を引き出すのは難しいが、*primary* (objective) な絶望が外的な苦境に対する絶望という側面が強いものに対して、*antithetical* (subjective) な絶望とは自己に対する内的な絶望と解釈することもできる。

イエイツはこの二項対立を受け入れ、それを『カルヴァリ』に取り入れた。イエイツは『踊り子のための四つの劇』(*Four Plays for Dancers*) の解説において、その二項対立を説明する。イエイツはそこで “I have therefore represented in Lazarus and Judas types of that intellectual despair that lay beyond His sympathy”²² 「それ故、私は神の憐みを超えて存在するある種の知的な絶望をラザロとユダの中に表現した」と記した。その解説でイエイツは *antithetical* (subjective) な絶望を「知的な絶望」とも呼び、*primary* (objective) であるキリストの同情を超えたものとしている。これは自動筆記との対話の内容に合致している。

『カルヴァリ』において、ユダの *antithetical* (subjective) な絶望は救済されない。少なくとも、キリストの贖罪の死は彼のためではない。イエイツは『カルヴァリ』において、鳥、特に白鷺を *antithetical* (subjective) の象徴とし²³ “God does not die for the white heron”²⁴ 「神は白鷺のために死にはしない」というリフレインを響かせる。また、ユダは “I, Judas, and no other man, and now / You cannot even save me”²⁵ 「私はユダ、他の誰にもあらず、あなたは私すら救えない」という言葉をキリストに投げかける。『カルヴァリ』においてユダは贖われてはいない。しかし、彼はそもそも贖われる必要がない精神の自由を、自ら神の子を売り渡すという行為によって作り出しているのだ。

3. 『幻想録』におけるユダ

さて、『幻想録』において、イエイツはユダをどのように記述しているのだろうか。『幻想録』の人物類型論である「大車輪」(“The Great Wheel”)において、ユダの名は28の類型の一つとして扱われてはいない。ヘレン・ヴェンドラー (Helen Vendler) は、ユダの名が皇帝ネロの説明に表れるがゆえに、ユダをネロと同じ26相 (Hunchbackの位相) としている²⁶。しかし、イエイツはあくまでも、 “his greatest temptation may be to defy God, to become a Judas”²⁷ 「神を否定すること、ユダになろうとすることがネロにとっての最大の誘惑であるかもしれない」と書いているの

であり、ユダ自身が26相であると書いているわけではない。ユダを理想として、ユダになろうと憧れるような人物は、本来ユダのような人物ではない。むしろイエイツは彼の仮面 (Mask) あるいは反対我 (anti-self) の理論にあるように、憧れの対象はその人間のあるがままの姿と真逆であると考えていることが多い。そのため、ユダとネロの本来の自己が同じ位相に位置するとは考えにくい。

それではユダは第何相とするのが妥当なのか。イエイツは自動筆記のすべてを無批判に取り入れたわけではないが、自動筆記はユダを第8相 (上弦の月) としている²⁸。自動筆記の原稿やイエイツの草稿をもとに『カルヴァリ』の成立過程を分析したジャニス・ハズウェル (Janis Haswell) は、イエイツがユダを『幻想録』の第8相に置いたことに同意しており²⁹、『幻想録』の補注版を出したキャサリン・ポール (Catherine Paul) と マーガレット・ミルズ・ハーパー (Margaret Mills Harper) もまた、この見解に同意している³⁰。第8相は *antithetical* の色相が始まる位相であり、色相の転移として葛藤が最大になる位相である³¹。これは “the greatest passion” のある位相³² であり、悲劇と闘争の位相³³ であり、crisis (= 原義は決定的瞬間) の位相³⁴ である。それは、現代 (1927年まで) の時代精神 (第22相, 下弦の月) の反対の位相³⁵ でもある。イエイツがユダをこの位相に置いたことは、彼にとってのユダの重要性を示すものでもある。

イエイツは『幻想録』において、その第8相の人物の説明として “He must be aware of nothing but the conflict, his despair is necessary, he is of all men the most tempted- ‘Eloi, Eloi, why hast thou forsaken me?’”³⁶ 「彼は葛藤以外何も知らず、彼の絶望は必然である。彼はすべての人間の中で最も誘惑されやすい。『エロイ, エロイ, なぜわたしをお見捨てになったのですか?』」と書いた。ここでイエイツが書いている人物「誘惑」³⁷ され「絶望」した³⁸ 人物とは、ユダのことであろう。

また、この説明の末尾にある言葉「エロイ, エロイ, なぜわたしをお見捨てになったのですか」は新約聖書のマルコによる福音書15章34節³⁹ に基づくものである。この聖句はキリストが十字架にかけられた際の最後の言葉の一つである。イエイツはこの言葉をユダの説明文に置くことによって、キリストの声であると同時にユダの言葉として引用していることになる。

キリストはこの言葉を含む7つの言葉を残して十字架上で息絶えたとされる⁴⁰ が、ユダも同日に絶望して首を吊って息絶えた。神に見捨てられたとされるユダの絶望の中での自死を表現する言葉としてイエイツがキリストのこの言葉を引用したことは神学的にも興味深い。

また、第8相の *Will* は “War between Race and Individuality”⁴¹ 「民族と個人間の戦争」であるという。イエイツの体系では、Race とは一般的な意味における人種や民族とは違い、人の心の中に存在する「非個人的」「集合的」な思い⁴² であり、そ

の民族として古くから伝えられてきた社会的・文化的な規範⁴³ のことでもある。またこれは彼の体系において、あるべき理想の自己（彼の体系では *Ought* とも呼ばれる）として目指すことを強いられた *enforced Mask*⁴⁴ を意味する。

そのような Race と対立するのが *Individuality* である。これは「あるべき」仮面ではなく、本来あるがままの自己（彼の体系では *IS* とも呼ばれる）たろうとするもの⁴⁵ である。イエイツがユダをこの位相に置いたということは、ユダを Race と *Individuality* の戦いを戦った人間とも見ていたことを示唆する。

この劇『カルヴァリ』では、神の手のひらの中（全体）か、神なき個人の孤高の境地（個）かの対立という問題が扱われている。しかし、この Race という概念はまだ民族主義的な色彩を保っている。この点を考慮すれば、イエイツのユダ観は、完全に民族の問題と切り離されてはいないと推測することも可能である。

4. 『骨の夢』 とユダ

イエイツの作品において、この “War between Race and Individuality” を戦った登場人物がいる。それは『カルヴァリ』と同時に構想された裏切りの劇『骨の夢』の登場人物、自分たちの愛ゆえにアイルランドを売り、ノルマン人を招き、それから何百年もの植民地化につながったとされる人物、ダーモット (*Diarmuid*⁴⁶) とダヴォーギラ (*Dervorgilla*) である。

この劇では、復活祭蜂起で戦った若い男 (*Young Man*) の前に、ダーモット（戯曲内の役名は *Stranger*）とダヴォーギラ（戯曲内の役名は *The Girl*）の霊が現れ、対話をする。二人は呪いを受け、夜の山を彷徨う定めとされている。ダヴォーギラ曰く、彼女たちと同じ民族の誰か一人でも彼らを許すと言ってくれば、呪いは解けるという。しかし、若者は個人的な恋愛感情ゆえにアイルランドを売った二人を許すことはできない。

YOUNG MAN.

You speak of Diarmuid and of Dervorgilla

Who brought the Norman in?

THE GIRL.

Yes, yes I spoke

Of that most miserable, most accursed pair

Who sold their country into slavery, and yet

They were not wholly miserable and accursed

If somebody of their race at last would say:
'I have forgiven them.'

YOUNG MAN.

Oh, never, never

Will Diarmuid and Dervorgilla be forgiven.⁴⁷

若い男

ノルマン人を導き入れた

あのダーモットとダヴォーギラについての話だな。

若い女

ええ、あの最も惨めな

最も呪われた二人、

自らの国を奴隷状態に売り渡した者たちについてお話ししました。

でも、もし彼らの民の誰か一人が

「彼らを赦す」と最後に一言を言ってくれるならば、

彼らは呪いや惨めさから解放されるのです。

若い男

ああ、絶対に絶対に

ダーモットとダヴォーギラは赦されることはない。

ユダが銀貨30枚でキリストを売ったように、ここでも“sold”という語が使われている。Race（全体）を重んじ、復活祭蜂起に参加した若者は、ある意味で *primary* (objective) であり、Individuality（個）を重んじてRace（全体）を裏切ったダーモットとダヴォーギラはある意味で *antithetical* (subjective) に属する。また、彼らは二人でいるが、それぞれは触れ合えず、お互いに孤独⁴⁸であり、内面の葛藤を抱えている⁴⁹ ことから *antithetical* (subjective) と言えよう。そうすると、民族的な裏切り者を赦せないという感情だけでなく、自動筆記の言うように、*primary* (objective) な若者は *antithetical* (subjective) なダーモットとダヴォーギラの絶望を憐れむことができない、という構図が成り立つ。

そして、『幻想録』における第8相の人物の説明「彼は闘争以外のなにものも知らず、彼の絶望は必然である。彼はすべての人の中で最も誘惑されやすい」は『骨の夢』の恋人たちにもあてはまる。彼らはお互いに誘惑され、苦悩の闘争の中で生き、

そして絶望した。8相の説明の末尾に置かれたキリストの十字架上での言葉「なぜ汝我を見捨てたまいしや」という声もまた、彼ら恋人たちに当てはまる。彼らは後の時代のアイルランド人、特に独立運動の世代のアイルランド人から見捨てられた。『骨の夢』においても、若者に赦しを求めた彼らは最後まで赦しを得ることができない。ダーモットとダヴォーギラはイエイツにとって、ただ国を売った裏切り者というよりもむしろ、“War between Race and Individuality”を戦ったユダでもあるのだ。

一方、そのアイルランドのユダたるダーモットとダヴォーギラと対峙した若者は、復活祭蜂起に参加したあと、西に逃げてきた男である。民族主義的な側面もあるが、職業的革命家ではない。もちろん、個よりも民族全体を重視する側だとして配置されている⁵⁰が、民族を裏切った二人を危うく赦しそうになった⁵¹と彼自身が劇の最後に吐露するように、彼も迷う存在として描かれている。そのように、登場人物を図式的にしすぎないことが、この戯曲にダイナミズムと深みを与えていることも指摘しておくべきだろう。イエイツの詩「復活祭, 1916年」(“Easter, 1916”)において、民族独立という一つの「夢」(“dream”)を追い求め⁵²すぎた革命家が「石の心」(“stone of the heart”)になってしまったことについて歌われる⁵³が、この戯曲の若者は、まだ幸いなことにそうなってはいないようだ。そのように、イエイツはあえてこの若者を頑なにしすぎなかったのかもしれない。

若者は迷いながら、半ば自分に言い聞かせるようにダーモットとダヴォーギラを3度否認する⁵⁴。これは聖書においてキリストを3度否認した後に鶏の声を聞いた使徒ペトロのモチーフだろう。イエイツは『カルヴァリ』においてペトロを登場させることも考えていた⁵⁵が、そのモチーフはこの劇に引き継がれたと考えることができる。民族を裏切った人物をユダとして配置しているのに対して、目の前で苦しむ人物を、民族への思いゆえに見捨てる人物をペトロとして配置していると読むこともできる。

結論

イエイツは当初、ゲーテ的な民族主義のユダを考えていたが、自動筆記の示唆により、*antithetical* (subjective) な人物としてのユダを見出し、それを『カルヴァリ』に描いた。また、『幻想録』ではユダを *antithetical* (subjective) な第8相の人間とした。その第8相は“War between Race and Individuality”の位相である。これは『カルヴァリ』のユダに当てはまるだけでなく、同時に構想されていた『骨の夢』のダーモットとダヴォーギラにも当てはまるものである。

自動筆記からさまざまな示唆を受けたイエイツだったが、彼は民族の裏切りについての劇を書くこと自体を断念したわけではない。そのように、民族についての彼の思いも、『幻想録』には表れているのである。

本論文は、2015年11月8日に西南学院大学で開かれた、日本イエイツ協会第51回大会の研究発表「A Visionにおける『エロイ・エロイ・レマ・サバクタニ』」に大幅に加筆修正したものである。

《注》

- 1 大貫隆編著『イスカリオテのユダ』（日本キリスト教団出版局，2007）241頁。
- 2 荒井献『ユダのいる風景』（岩波書店，2007）60-61頁。
- 3 大貫隆，8頁。
- 4 William Butler Yeats, *The Letters of W. B. Yeats*, Allan Wade, ed., (London: Hart-Davis, 1954) 645.
- 5 荒井献，63-64頁。現在では「イスカリオテ」を「シカリ派」と見なす見解は一般的ではない。現在主流である説は、「ケリオテ出身の」という意味だとする解釈である。
- 6 同上。
- 7 ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ，『詩と真実：第一部』，山崎章甫訳，（岩波書店，1997）308頁。
- 8 Marjorie Perloff, "Yeats and Goethe" *Comparative Literature* (23: 2, 1971) 125.
- 9 Abbey Bender, *Israelites in Erin: Exodus, Revolution, and the Irish Revival* (Syracuse UP, 2015) 2.
- 10 同上。
- 11 A Visionの1937年版の日本語訳は，鈴木弘訳『ヴィジョン』（北星堂，1978年）および島津彬郎訳『幻想録』（筑摩書房，2001年）が存在する。イエイツの神秘主義的体系における特殊な専門用語について，それぞれの訳者は独自の訳語を与えており，それらは統一されているわけではない。そのため，本稿では便宜上，より新しい翻訳である島津訳の書名を用いるが，専門用語については基本的に原語を用いることとする。なお，2019年現在，1925年版には日本語訳は存在しない。
- 12 Yeats, *The Collected Plays of W. B. Yeats* (New York: Macmillan, 1967) 454.
- 13 Yeats, *A Vision: The Original 1925 Version*, Catherine E. Paul and Margaret Mills Harper, eds., (New York: Scribner, 2008) 90; Yeats, *A Vision*, (London: Macmillan, 1937) 178. なお，以降1925年版はAVA，1937年版はAVBと略記する。
- 14 イエイツの妻ジョージは1917年10月に自動筆記を始めた。AVBにイエイツが書いたところによれば24日（AVB, 8），ロイ・フォスター（Roy Foster）によれば27日（Roy Foster, *W. B. Yeats: A Life. Vol. II. The Arch-Poet* (Oxford:

Oxford UP, 2003)105-06) と日付は異なるが、この年の10月下旬にこの交流は始まった。その自動筆記を通した会話は（後にジョージの睡眠中の言葉として）長年続いた。その自動筆記は、本当に教導霊が働いていたか否かに関わらず、イエイツにとって思索を深める重要な儀式であった。

- 15 Steve Adams, Barbara Frieling, and Sandra Sprayberry eds., *Yeats's Vision Papers Volume I The Automatic Script: 5 November 1917 – 18 June 1918*, (London: Macmillan, 1992) 291.
- 16 Yeats, *AVB*, 83-84.
- 17 同上, 294.
- 18 同上, 292.
- 19 同上.
- 20 同上, 292-23.
- 21 同上, 293.
- 22 Yeats, *Four Plays for Dancers* (London: Macmillan, 1920), 136-37.
- 23 同上, p. 136.
- 24 Yeats, *The Collected Plays of W. B. Yeats*, 449, 450.
- 25 同上, 455.
- 26 Helen Vendler, *Yeats's Vision and the Later Plays* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1963) 175.
- 27 Steve Adams, Barbara Frieling, and Sandra Sprayberry, 291.
- 28 Yeats, *AVA*, 90; *AVB*, 178.
- 29 Steve Adams, Barbara Frieling, and Sandra Sprayberry, 291.
- 30 Janis Haswell, "Resurrecting Calvary: A Reconstructive Interpretation of W. B. Yeats's Play and Its Making," *Yeats Annual* (15, 2002) 169.
- 31 Yeats, *AVB*, 83.
- 32 Yeats, *AVA*, 112-13.
- 33 Yeats, *AVA*, 22.
- 34 Yeats, *AVA*, 22.
- 35 Yeats, *AVA*, 177; *AVB*, 299.
- 36 Yeats, *AVA*, 45; *AVB*, 199.
- 37 悪魔に誘惑された：ルカ22章3節。
- 38 絶望して自殺した：マタイ27章5節。
- 39 詩編22の冒頭の言葉でもある。
- 40 十字架上の7つの言葉とは、伝統的にルカ23章34節、同43節、ヨハネ19章26節-27節、マルコ15章34節およびマタイ27章46節、ヨハネ19章28節、同30節、

- ルカ23章46節の7つである。複数の福音書に共通して見られるのは、イエイツも引用した「わが神、わが神、どうして私を見捨てになったのですか」だけである。
- 41 Yeats, *AVA*, 43; *AVB*, 116. なお、1925年版の初版では *race* と *individuality* の頭文字は小文字だが、1937年版ではそれらの語の頭文字は大文字になっている。これは、イエイツがそれらの語を独自の概念として自覚的に用いていることを示す。
- 42 Yeats, *AVA*, 45; *AVB*, 119.
- 43 Yeats, *AVB*, 85.
- 44 Yeats, *AVA*, 19; *AVB*, 85.
- 45 *Individuality* は、『幻想録』の中で明確な定義はなされないが、個人的なものを指す特別な語である。Phase 7, 8, 9, 21, 22, 23が “phases of individuality” 「individualityの位相」とされており (*AVA*, 73; *AVB*, 155), Phase 8と Phase 22で最も強くなる (*AVA*, 19; *AVB*, 86)。また、それら *individuality* の位相というものは, “where the *Will* is studied less to the *Mask* than in relation to itself” 「*Will* は *Mask* との関係からよりも *Will* そのものとの関係の中で極められる場である」 (*AVA*, 73; *AVB*, 155) ともある。つまり *Ought* (あるべき理想の自己) から、つまり「強制された仮面」である (*Race*) から自由であろうとする自己 *IS* (あるがままの自己) であると図式化できる。
- 46 *Four Plays for Dancers* では *Dermot* 表記である。
- 47 Yeats, *The Collected Plays of W. B. Yeats*, 442.
- 48 同上, 440.
- 49 同上.
- 50 この戯曲において、この若者は復活祭蜂起で敵として戦った英国兵（および王立アイルランド警察）を “not of our race” と言っているが、彼があえてそう強調するということは、その英国兵・警官の多くがアイリッシュであり、復活祭蜂起の戦いもアイリッシュ同士の同士討ちという側面があったということを内心気づいていたため、それを打ち消す必要があったためとも考えられる。Yeats, *The Collected Plays of W. B. Yeats*, 436.
- 51 同上, 444.
- 52 Yeats, “Easter, 1916,” lines 70-71.
- 53 同上, lines 41-44; 57-58.
- 54 *The Collected Plays of W. B. Yeats*, 437; 438; 445.
- 55 Steve Adams, Barbara Frieling, and Sandra Sprayberry, 31.